

『ナイルの夕暮れの舟』19世紀の彩色リトグラフ（Wellcome Collection、CC BY 4.0）

曲目解説

Méditation

タイスの瞑想曲

Jules Massenet（1842–1912） ジュール・マスネ

曲目解説

Méditation タイスの瞑想曲

from the opera Thaïs, Act II ／ 歌劇『タイス』第2幕より

Jules Massenet（1842–1912） ジュール・マスネ

初演	1894年3月16日、パリ・オペラ座（ガルニエ宮）
原曲の編成	独奏ヴァイオリンと管弦楽（オペラでは、終わりに舞台裏の合唱が加わる）
調・拍子	ニ長調・4分の4拍子・Andante religioso（宗教的な気分で、歩く速さで）
この楽譜	Christopher Fazzi 浄書（IMSLP、CC BY 3.0）の独奏ヴァイオリンの旋律から入力し、Heugel 1894年初版と照合

作曲者

ジュール・マスネは、フランス中部のサン＝テティエンヌの近くに生まれ、
11歳でパリ音楽院に入学しました。1863年にローマ大賞を受け、のちに母校の作曲の教授として、
多くの弟子を育てています。

甘くしなやかな旋律と、劇の場面に細やかに寄り添う音楽で、
19世紀末のパリで最も人気のあるオペラ作曲家となりました。代表作に『マノン』（1884年）、『ウェルテル』（1892年）、そしてこの『タイス』（1894年）があります。

曲の成り立ち

『タイス』は、アナトール・フランスの小説（1890年）をもとに、ルイ・ガレが台本を書いたオペラです。
題名の役は、マスネが信頼を寄せていたアメリカ出身のソプラノ、
シビル・サンダーソンのために書かれました。

舞台は4世紀のエジプトです。砂漠で修行する修道士アタナエルは、
アレクサンドリアで華やかな暮らしを送る遊女タイスを、神の道へ導こうと決意します。

第2幕、アタナエルに生き方を問われたタイスは、強く反発しますが、ひとりになって心を揺らします。
その場面と次の場面をつなぐ間奏曲として奏されるのが、この『瞑想曲』です。曲が終わると、
タイスはアタナエルに、すべてを捨てて修道院へ向かう決心を告げます。

この旋律は、第3幕の終わり、砂漠の修道院で死を迎えるタイスと、
彼女への愛に気づいて苦しむアタナエルの場面で、ふたたび現れます。オペラを離れても、
ヴァイオリンとピアノの編曲（マルシック編、1894年）をはじめ、さまざまな楽器で親しまれている曲です。

曲調と聴きどころ

ハープの分散和音にのって、独奏ヴァイオリンが、ゆったりと上がっては下りる主題を歌い出します。祈りのような静けさの中に、タイスの心のときめきや迷いがにじみます。

中間部では、速さが少しずつ増し、「少しずつ情熱的に」（poco a poco appassionato）と、心の揺れが大きくなっていきます。頂点を越えて静まったあと、ふたたび主題が戻ってくるのは、迷いを抜けて、心が決まったことを表すかのようです。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜2	前奏（ハープの分散和音）
3〜20	主題。3〜10小節で歌い出し、10小節で f に高まる。11〜20小節で、さらに続きを歌い、rall. で静める
21〜39	中間部。Più mosso（速さを増して）から poco a poco appassionato へ。32小節で ff の頂点を迎え、34小節の più mosso agitato（激しく）を経て、38小節の rall. で主題へ戻る
40〜57	主題が戻る（3〜20小節と同じ音）
58〜71	結び。Calmato（静まって）、pp。最後はヴァイオリンのハーモニクス（倍音）の澄んだ音で、高いラからレへ、静かに消えていく

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ニ長調

レを主音とする長調で、調号は♯が2つ（ファとド）。中間部（22〜39小節）では、調がめまぐるしく移ろい、心の揺れを表します。

拍子　4分の4拍子

1小節に4分音符が4つ。ハープの伴奏は8分音符の分散和音です。

テンポの変化

中間部では Più mosso（速く）、agitato（激しく）と速さが変わり、主題が戻ると元の静かな速さに戻ります。速さの変化そのものが、物語を語っています。

篠笛の楽譜と調について

　同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ニ長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ヘ長調（原曲より短3度上）、チューナーの基準 A＝436Hz（全体を25セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026